

英国議会科学技術室インターンシップ参加報告書

2009年3月5日

国際開発工学専攻修士1年

向井登志広

1. はじめに

2009年2月2日（月）から2月13日（金）までの2週間、英国、ロンドンにある英国議会科学技術室（UK Parliamentary Office of Science and Technology, POST）¹でのインターンシップに参加した。本インターンシッププログラムは、東京工業大学大学院総合科目「科学技術コミュニケーション論」という講義の一環として行われており、POSTでのインターンシップは今回で3度目の実施であった。

POSTは英国議会内の組織で、「科学技術に関する政策の、独立かつどの組織にも偏らない調査・分析をおこない、英国議会内での議論をサポートする」ことを理念に掲げている。

具体的な業務としては、

- ① POSTNOTEの発行（月に1本—5本）
- ② 英国議会内の特別委員会のサポート
- ③ 英国議会内で論点となっているテーマに関する討論会の開催

といったものがあり、POST内のスタッフ（10—20名程度、ほぼ全員がPhD取得者と思われる）がそれぞれの専門に即して独自に業務を行っている。

POSTが取り扱う分野は以下の5分野がある。議会サポート業務が活動理念であるため、科学技術の中でも特に、公共政策と強いかかわりを持つ分野の業務が行われている。

- ① 生物科学・生命科学・保健分野
- ② 環境・エネルギー分野
- ③ Physical science（物理科学）・IT分野
- ④ 科学政策
- ⑤ 国際開発と科学技術



写真1：英国議会議事堂の時計台、BIG BEN。私たちのインターンシップが始まった2月2日、ロンドンは18年ぶりの大雪に見舞われていた。

¹ http://www.parliament.uk/parliamentary_offices/post.cfm

私がPOSTでのインターンシップに参加することを決めたのは『科学技術と公共政策が、実務の場でどのように影響を与えあっているのか?』ということ、体験を通して学ぶ絶好の機会だと考えたからだ。

私は現在、先進国・新興国で実施されている再生可能エネルギー政策、省エネルギー政策に関心を持っている。これらの政策は科学技術と強い関連性を持っており、上記のような問いを前々から抱えていた。また、英国議会は「議会の母」と呼ばれるように、議会制民主主義の先進例として有名である。そのような議会内の、科学技術に特化した組織であるという点も、参加を決める一要因であった。

2. POSTNOTE²について

インターンとしての具体的な経験について述べる前に、POSTNOTE について簡単に説明する。なぜなら、POSTNOTE の発行は POST の主要な業務の一つであり、ここで説明することでより POST という組織の役割をイメージする一助をなると考えるからである。

POSTNOTE は、イギリス議会・イギリス国内で特に注目を集めている科学技術をテーマにして書かれている、A4 用紙 4 枚の記事である。科学技術の専門知識のない議員にもわかるように書かれており、月に 1 本から 5 本程度、不定期に発行されている。記事は POST スタッフや、3 ヶ月間の長期インターン生（長期プログラムは PhD 課程の学生のみ受け入れている）によって書かれている。

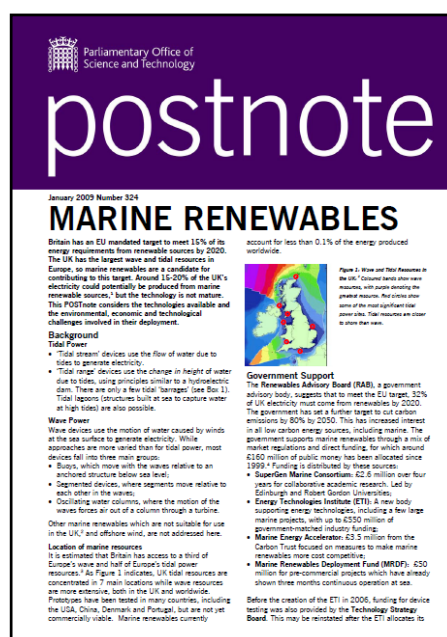


写真 2 : POSTNOTE

最近の記事のテーマをあげると、以下のようなものがある。

< 2009 年 2 月発行 >

「食品衛生基準」、「野性シカ」

< 2009 年 1 月発行 >

「海洋エネルギー」、「歴史から得られる教訓（科学政策に関する記事）」、「高知能交通システム」、「イーデモクラシー（e-Democracy）」

² 過去のPOSTNOTEはhttp://www.parliament.uk/parliamentary_offices/post/pubs.cfmからダウンロード可能。

POSTNOTE は、単に話題の科学技術をわかりやすく提供しているだけでなく、POST スタッフと上院、下院の議員との橋渡しの役割も担っている。科学技術に関する専門知識がない議員が、自分の関心のあるテーマを扱っている POSTNOTE を探し、その著者とコンタクトをとる例もあるそうだ。

3. インターンシップのスケジュール

Day	Date	Event
Mon	2月2日	・ EPTA ミーティングに参加
Tue	2月3日	・ パリ政治学院の学生3人が Cope さんに 原子力エネルギー問題についてインタビュー
Wed	2月4日	・ AEA/Wolfson College Oxford Symposium (気候変動に関するシンポジウム) に出席
Thu	2月5日	・ RTPI Planning Awards 表彰式に出席 (POST 業務の手伝い)
Fri	2月6日	(POST 業務の手伝い)
Mon	2月9日	(POST 業務の手伝い)
Tue	2月10日	・ Cambridge へ出張。日本大使の講演会に出席
Wed	2月11日	(POST 業務の手伝い)
Thu	2月12日	(POST 業務の手伝い) ・ 200th anniversary celebration of Charles Darwin
Fri	2月13日	(POST 業務の手伝い) ・ Reception of the opening of London Office of Kyoto University

プログラムは基本的に、インターンを受け入れてくださった POST ディレクターのデビッド・コープ教授と共に、彼の参加するイベントに同行する、というものであった。また、それとは別に、POST スタッフ業務の手伝いもさせてもらった。三人のインターンは、大学で、それぞれ異なる専門を学んでおり、手伝う業務内容や関わるスタッフも少しずつ違っていた。



写真3：デビッド・コープ教授（左）とインターン3名。
200th anniversary celebration of Charles Darwin にて。

A) 手伝った業務について

私はこの2週間で様々な業務の手伝いをさせていただいた。その中でも特に、私に関心を持った業務をここで紹介したい。

① International Development Committeeサポート業務

英国議会下院のなかの委員会の一つに、国際開発委員会（International Development Committee）という委員会がある。その名のとおり、国際開発に取り組んでいる委員会なのだが、この委員会を POST のスタッフ2名（ナスさん、カースティさん）がサポートしていた。私は現在東工大で国際開発工学専攻に所属しており、途上国開発問題に関心を持っていた。そのため、この二人の業務の手伝いを通じて、英国議会内での途上国開発への取り組みに触れることができた。

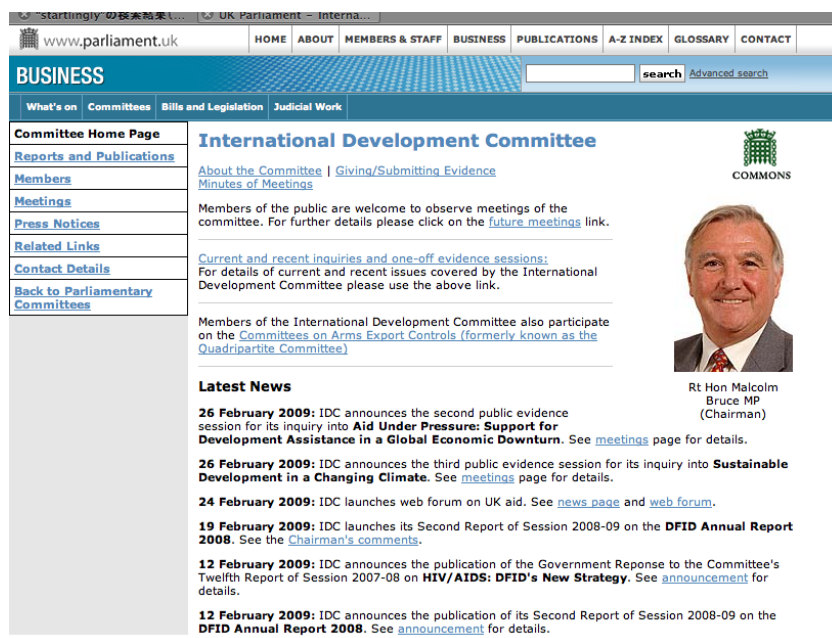


写真4 : International Development Committee のホームページ

具体的に、国際開発関連で私が手伝った業務は二つある。

まず一つ目は、途上国の科学政策立案の能力を向上させるための取組がなにか日本で行われていないかを検索する作業だ。これを頼まれたおかげで、日本の「科学政策」「国際開発」の双方をキーワードとした動きをいくつか発見することができた。その中でも特に興味深かったのが、TICAD4 のフォローアップとして行われた「第一回日本アフリカ科学技術大臣会合」である。これは昨年10月に日本で行われた会合で、日本及び32のアフリカ諸国の科学技術担当大臣が出席した会合である。この会合で、これから毎年定期的に同じ

会合を行うと共に、専門家グループの創設や、調査活動の推進等が決まったそうだ。

「科学政策」は、最先端の技術を育てるための政策であり、国際開発とはそれほど接点がないように思っていた。しかし、途上国議会の能力向上のために、日本でもこのような取り組みが行われていることを知ることができた。

二つ目は、ケニアとタンザニアにおける農業、園芸分野の輸出に関する資料を、インターネットを使って検索する、というものでした。国際開発委員会では現在、気候変動とアフリカ支援の双方に資するためにどうすればいいか、ということを考えているらしく、そこで農業、園芸部門に目をつけているのだそうだ。

資料を検索する過程で私も知ったのだが、タンザニアは現在、イギリス向けに花の輸出を行っており、それが成功事例として国際機関から注目を集めているのだそうだ。それをケニアでもできないのか、ということに現在英国議会は考えているらしい。こういった問題意識を持っている研究者や、あるいは研究論文をインターネットで検索し、最終的にリストを作ってナスさんに渡した。

また、これは業務手伝いではなかったのだが、Richard さんというウガンダ人の方と昼食を一緒した。この方はウガンダの議会科学技術室からフェローとして三ヶ月間、英国議会 POST に来ていた。イギリス議会、POST が現在、途上国議会の能力向上のためのプロジェクトの一環として、彼を受け入れていたのだ。Richard さんと一緒に昼食を頂いて、ウガンダの科学技術室について、少しだが話を伺うことができた。彼とは気があって、今でもメールのやり取りをしている。彼とのネットワークは、今後も大切にしたいと思う。

任された業務は、はっきり言うと、非常に簡単なものばかりであった。しかしそのような作業でも、実際にお手伝いする中で、英国議会の仕組みについての新たな気づきや、現在英国議会がどのような活動を行っているのか、その一端を知る非常に良い機会となった。また、英国議会の先進性に触れる中で、自分の国である日本の国会について自分が全く無知であることにも気付くことができた。ここで得た関心は、今後も大切にしていきたいと思う。

② 上院図書館でのPOSTNOTE展示業務

5日、議員に対して POSTNOTE を宣伝するため、過去の POSTNOTE の展示が行われた。展示、と言っても、過去の POSTNOTE を図書館隣の机の上に並べ、関心を示した議員に対して説明をする、という、いたってシンプルなものである。

私が手伝いをしているとき、一人議員が「原子力発電」をテーマにして書かれた POSTNOTE を手に取り、私と一緒にいた POST スタッフとやり取りをする場面があった。あとでその POST スタッフにやり取りの内容を聞くと、「あの議員は自由民主党のテベルソ

ン上院議員で、エネルギー分野のスポークスマンだ。近く、議会で原子力発電プラント建設について話し合おうと思っているのだけれど、POSTにある情報をもらえないか」というようなことを頼まれたらしい。

私はこの体験を通して、POSTのウェブサイトで一番初めに説明されている「どの組織にも偏らない、独立した機関」である、という点の重要性を実感した。原子力発電のような、世界中で議論的となっている技術を、科学技術の専門家集団である POST が推進派、否定派という偏りを持っていては、政策にゆがみが生じるのだ。POSTは、ある議員をサポートするような分析情報を提供する場合、その議員の信念、意見にまでサポートを行ってはいらないし、反対意見を持つ議員に対しても、その議員が望みのであれば同じ分析情報を提供して、科学技術に関する情報の客観性を保たなければならないのだ。



写真5：上院図書館内（インターン・渡辺さん撮影）

B) 参加したイベントについて

次に、インターンシップ期間中に参加したイベントについて、いくつかここで紹介する。

① EPTAミーティング

2月2日9時半から、EPTA (European Parliament Technology Assessment)のミーティングに同席した。

EPTAは1990年に、欧州議会の後援のもと設立されたネットワークである。ヨーロッパの各国議会は、英国議会におけるPOSTと同じような機関を運営しており、それら18の機関が現在EPTAに加盟している。議長は一年ずつ交代で加盟機関が担う仕組みになっており、今日のミーティングで議長業務の引継ぎがなされた。2008年に議長を務めたオランダのRathenau Instituteのスタッフ2人がPOSTを訪問し、2009年に議長を務めるPOSTのDr. Davidと話し合った。

昨年議長を務めたオランダ人は、現在このEPTAには主な問題が二つあると主張した。一つは、今後どのようにこのネットワークを運営していくのか、ということである。設立から20年近く経ているにもかかわらず、EPTAはいまだしっかりしたネットワークを構築できていない。このネットワークをもっと活性化させなければいけない、という声が加盟機関から上がっており、今後具体的にどのように活動していくのかを話し合わなければならない、と彼は言っていた。具体的には、どこかの都市に事務局を設立することと、運営資金について話し合わなければならない、案を出すようにDr. Davidに依頼していた。

また、もう一つの問題は、今後このネットワークを活性化させていくために、どのように他の加盟機関を巻き込んでいくのか、という点であった。より強固、かつ欧州各国の国民に有用なネットワーク構築のために、加盟機関の積極的な参加を促す運営戦略が必要なのだということであった。

この会議に参加して、欧州各国の議会において、サイエンスコミュニケーションが重要な役割を占めていることを改めて感じた。POSTのような「政策と強いかわりを持つ、科学技術に特化した、独立した組織」が、ほとんどの欧州各国において設立されているという事実に驚いた。日本やアジア各国において、POSTのような機関の存在を聞いたことはない。せいぜい、各省庁のなかに、科学技術に特化した部署がある程度のような気がする。政策における、欧州の先進性、日本やアジアとの大きな差を感じた。

また、EUにおいて、政策というか「仕組み」の部分が非常に先進的な理由の一端に触れた気がする。EPTAという枠組みにおいては、オランダの機関が、一年間議長を務めたという「責任」と「熱意」を持っているため、そこから議論が生まれ、ヨーロッパ全体に

広がっていくのだと感じた。EPTA というネットワークがあるために、サイエンスコミュニケーションに対する各国議会の問題意識が日本と比べて（単純に考えると）18 倍高い状態にあるのだと思う。そのような、国境を接するぐらい物理的に近隣諸国と圧力を与えあうような国際関係が日本にはなく、会議を傍聴しながらヨーロッパを羨ましく思った。

② パリ政治学院学生3人によるインタビュー

3日9時半から、Sciences Po（パリ政治学院）の大学院生3人が Dr. David を訪問し、インタビューを行った。内容は、イギリスにおける原子力発電の取り組みについてであった。周知のとおり、フランスは米国に次いで、世界で2番目に原子力発電の規模が大きい国である（日本は第三位）。この三人の学生は、ヨーロッパにおいて、原子力発電の普及を阻害している要因は何かを調査しているようであった。Dr. David へのインタビューの前に、フィンランドとドイツでも調査を行ってきたそうだ。



写真6：インタビューにて

インタビューの中で興味深かったのが、原子力発電技術に対する、国民の理解度の問題である。Dr. David は、原子力発電推進は「時間」と「国民の意識」の間でトレードオフの関係がある、と言った。すなわち、負のイメージが強い原子力発電は国民からの同意を得ることが重要なカギを握っていて、その一方で、国民に対して原子力発電がどのようなものを使用し、どのような過程を経て発電され、その後の廃棄物はどのように処理されているのか、またそれら一連の発電活動がどのような基準のもとに行われているのか等、を理解させ、納得させていくことに時間がかかる、ということであった。

また、インタビューを行った学生3人のうちの1人が、ドイツでのインタビューを通じて「ドイツ人は技術的な側面からの安全性への考察を全く行うことなしに、原子力発電を否定していることに疑問を持った」というようなことを言っていたのも印象的であった。

これら原子力発電に関する問題は、私も日本で感じたことがある。大学院の授業で柏崎の原子力発電所について触れられた時があった。「技術者からみれば、何の問題もなかった地震なのだ。と、こんなことを言ってしまうと国民から猛攻撃をうけるのです。」というようなことを、その講義の講師は言っていた。この話を聞いて、なんだか隠れて原子力発電を行っているような印象すら受けた。安全管理、耐震技術に自信があるのなら、日本全国

の人々に、科学技術の専門知識がない人にもわかるように説明すべきである。個人的な意見だが、特に日本の技術者は、国民性として、サイエンスコミュニケーションという考え方が欠けており、なおかつ、定着が難しいのではないかとそのとき強く感じた。

原子力発電に関して、私はまだ自信を持って賛成、反対を言えるだけの知識がない。日本国内ではそんなに心配しなくてもよいのだろうが、世界中で原子力発電を推進しようとするれば、核兵器の問題も大きくなって来るだろう。日本人である私にとって、非常に身近な発電技術にも、サイエンスコミュニケーションの観点から大きな問題を含んでいるのだということに気付かされた時間であった。

③ Annual Luncheon at Houses of Parliament

3日、Dr. David が招待された昼食会に、私たちインターンも連れて行ってもらった。この昼食会は、英国議会のアドバイザーを務める、サイエンスのバックグラウンドを持った研究者やエンジニアの集まりで、50人近くの参加者があった。このグループは毎月一度ミーティングを行っており、今日の昼食会は一年に一度のことなのだそうだ。



写真7：Annual Luncheon

これほどの規模、かつ活動力をもった、英国議会をサポートする科学者たちのグループが存在すること自体、私にとって非常に新鮮な驚きであった。よく英国と日本は政治システムが似ているといわれるが、洗練度がまったく異なっているように感じた。

④ ケンブリッジへ出張

9日、ケンブリッジ大学を訪れる機会を得た。

インターンの受け入れ人であるデビッド・コープ教授は学部と PhD をこの大学で過ごしたそうで、いろんな話を聞かせてもらった。特にコープ教授は経済学を学んでいたようで、私が、開発経済学の分野で著名なアマルティア・セン教授（元トリニティカレッジ学寮長）について聞くと、「彼の奥さんとオフィスが隣だったよ」と言っていた。教授の話や、町の風景から、学問の歴史を生み出してきた土地に自分がいること、自分がイギリスに来てい



写真8：トリニティカレッジ敷地内の喫茶店

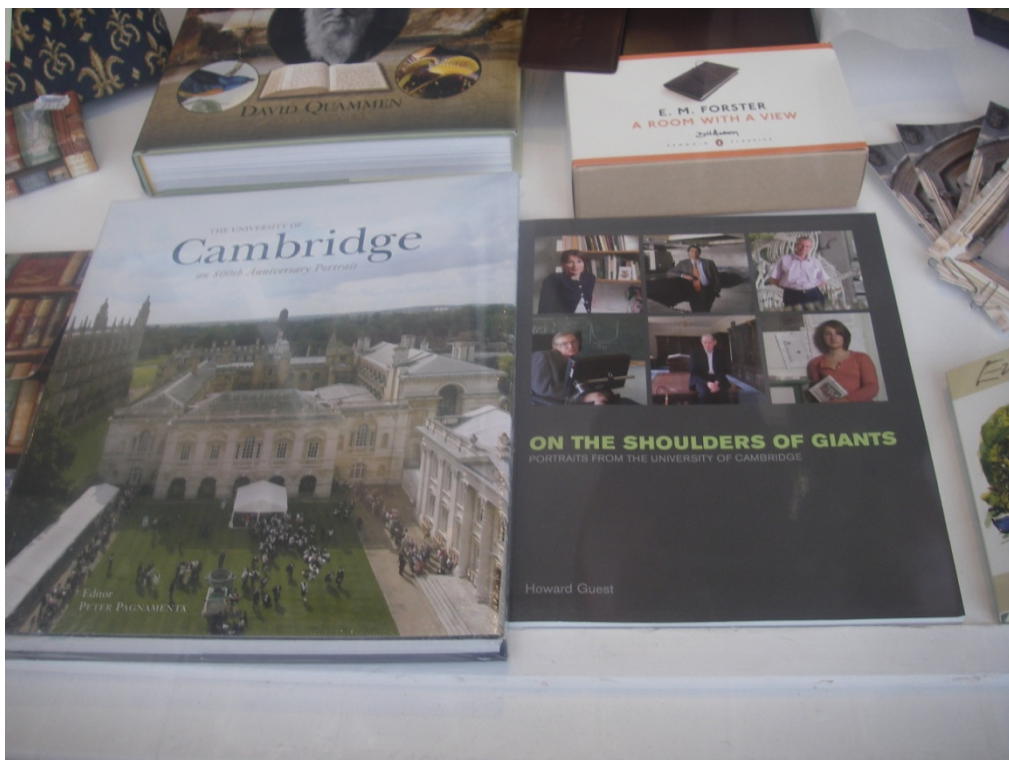


写真9：近くの本屋で見つけた、ニュートンの有名な言葉



写真10：キングスカレッジチャペル

⑤ Dana CentreでのScience Caféに参加

11日のインターンシップを終えたあと、19時から化学博物館内のダナセンターで行われたサイエンスカフェに参加した。

サイエンスカフェとは、「食べたり、飲んだり、隣の人とおしゃべりしながら、サイエンスの最新トピックを楽しく知ろう」というイベントである。本場イギリスのサイエンスカフェを体験したい、という純粋な好奇心から参加した。私は東工大で開かれるサイエンスカフェに数回参加したことがあったので、日本とイギリスでのサイエンスカフェに、どのような類似、相違があるのか興味があった。

この日のテーマは'Taste the Flavor'、味覚と嗅覚に関する科学についてであった。イギリス内の研究機関、大学などに努めている3人のサイエンティストがプレゼンターとしてきており、それぞれが一つずつブースを用意していた。60人程度の参加者が3つのグループに分かれ、30分ごとにローテーションで各ブースの実験(?)を体験していく、という形式であった。

嗅覚と味覚の科学の最新トピック(味覚の繊細さがどのように決まるのか、嗅覚がどのように味覚に影響を与えているのか、物を食べたり匂いを嗅いだりしたとき幸福感を感じる物質がどのように分泌されるのか、などなど)は、率直に、非常にわかりやすく知ることができた。味覚と嗅覚という、「体験できる科学」という点からも、サイエンスカフェ向きの分野だったと思う。



写真11：説明しながら実験準備をする、大忙しの発表者。

参加者も待ってます。

私は以前、東工大で開催されたサイエンスカフェにも数回参加したことがある。同じ「サイエンスカフェ」の名を冠し、同じ趣旨のイベントを行っているのであるから、当然と言えば当然ではあるが、イベント自体の目的(サイエンスと一般の人たちがかかわる場)や、実際行われるプログラムの形式(食べたり飲んだりしながら、実際に体験してみて科学を理解する)は、私が東工大で体験したものと非常によく似ていると感じた。

しかしそのなかでもいくつか相違点や、双方を体験したことによって発見した気づきがあった。

まず、これは今回のイベントに限ったことかもしれないが、ダナ・センターでは、参加者の行動の自由の幅が広い、ということである。3つの小グループに分かれて、一つ一つのブースで、参加者は体験したい実験を自分の選択によって行い、ブースで説明している発表者、またその助手と自由に話すことができた。参加者は、体験をアウトプットする作業を自然におこなっていた。

また、プログラム全体を通して、科学を、エキサイティングなものとしてとらえてもらおうとする工夫をダナセンターがしているように感じた。たとえば、このイベントは「18歳以下入場禁止」である。これは、ただ単にアルコールを売っているから、という以上に、科学を「大人しか触れることのできない、エキサイティングなもの」としてとらえてもらおうという意図があるように感じた。また、スタッフの服装や施設内の装飾、照明もどこことなく近未来的な雰囲気があった。

さらに、このダナ・センターは科学博物館内の施設であり、毎回のサイエンスカフェのために外部から科学者が来ている。そのため、カバーする分野範囲が非常に広いと感じた。東工大では、大学内の研究者が発表し、「科学と一般の人々の交流の場」というよりも、「東工大と一般の人々の交流の場」という色が強いと感じた。

これらの気づきは、どちらが良い悪いというよりも、「ダナセンターのサイエンスカフェ」と「東工大に適合したサイエンスカフェ」の違いであると思う。インターネットで調べてみると、日本でも「サイエンスカフェ」の名を冠してイベントを行っている団体は結構いるようだ。このイベントは、比較的シャイな日本人にとってこそ有効な交流の場であるとも思うので、それぞれの団体独自の「科学と一般の交流の場」が広まっていったら、と思う。

⑥ ダーウィン生誕200周年記念@自然歴史博物館

2月12日は、『種の起源』で有名なイギリスの自然科学者、チャールズダーウィンの生誕200周年の日であった。イギリス国内で様々なイベントが催されていたようだが、私たちインターン生は幸運なことに、自然歴史博物館で行われた記念イベントに招待されていたコープ教授に同行することができた。

特別展示コーナーでは、趣向を凝らした展示があり、とても楽しむことができた。



写真12：会場は自然科学博物館の入口（インターン・ユーさん撮影）



写真 1 3 : ダーウィンのために用意された、200歳のバースデーケーキ。のちに切り分けられ、参加者に振る舞われました。



写真 1 4 : 展示のひとつ。「進化論は、異なる生命体が驚くほど似通った進化の過程をたどる理由を説明している」

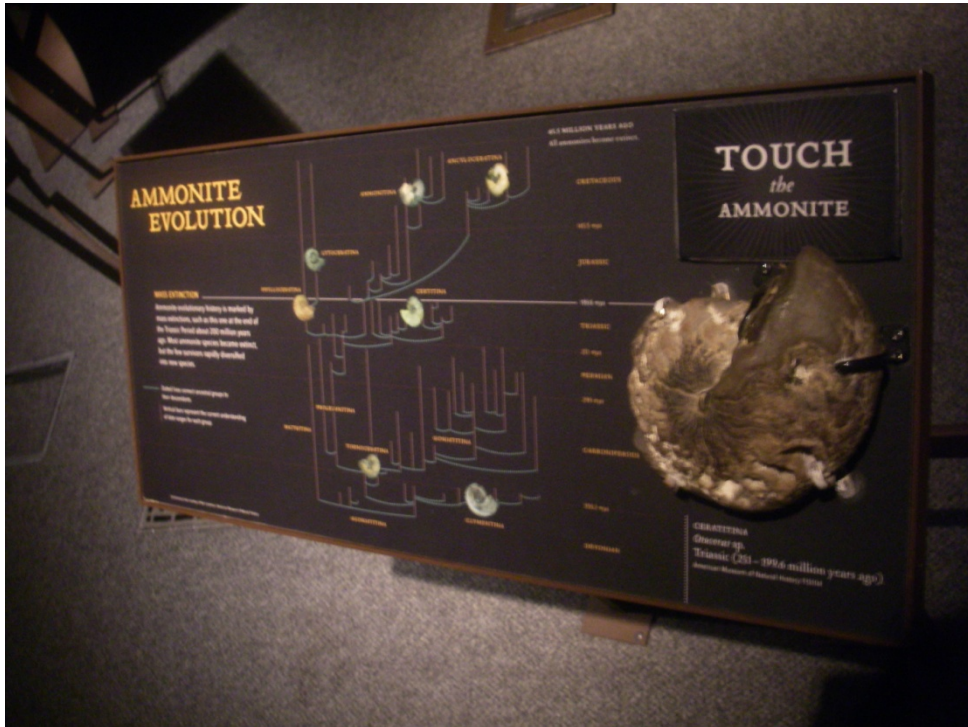


写真15:「触ってください!」の展示が数多く見られた

4. 最後に

私がこの POST インターンシップを通じて得たことは、大きく二つに大別できる。

ひとつは、「議会の母」と呼ばれる英国議会の先進性を、生の業務を通じて体験できたことだ。この体験を通じて、「科学技術」と「公共政策」が、互いに最適な影響を与えあうような「仕組み」が成り立っていること（あるいは「成り立ちうる」こと）、そしてその「仕組み」の重要性を議会関係者がしっかりと認識していることに、非常に驚きを感じた。

また、この気づきによって、「では、日本の国会にはどのような仕組みがあり、どのような認識を持って国会議員や国会関係者が自分の役割を果たしているのだろうか?」という、自国への関心を持つようになった。

そしてもう一つは、私がもともと収支研究で取り組もうと思っていた国際開発の分野に関する出会いや発見があったことだ。今回偶然出会ったウガンダ人のリチャードさんとのつながりは今後も大切にしていきたい。また、POST スタッフのナスさん、カースティさんの業務のお手伝いを通じて、現在英国議会がアジア、アフリカにたいしてどのような名取取り組みを行っているのかを知ることができた。

最後に、本インターンシップではたくさんの方々にお世話になりました。科学技術コミュニケーション論担当の先生方や、インターンを受け入れてくださったデビッド・コープ教授をはじめとした POST スタッフのみなさんのおかげで、このような素晴らしい体験ができました。厚く御礼申し上げます。この、実り多いインターンシップ制度が今後も継続して行われることを願うとともに、自分も本制度の OB として、できる限りのお手伝いをさせていただければと思っています。